

図 38 土坑 28～30、焼土 1～4

土坑 37 (図 39)

土坑 34 の南東に隣接する。長径 1.2 m、短径 0.7 m ほどの長楕円形を呈す。底面にはさらに大型のピット状に窪む。埋土上層に焼土と考えられる赤褐色土が堆積。(中森)

溝 3 (図 39)

土坑 32 の北東にほぼ接して位置する。東西両端は切られ、約 1.6 m の長さを検出した。幅 0.6 m、深さは 0.2 m ほどを測る。(中森)

溝 4 (図 39)

I 9 杭の南東付近に位置する。長さは約 1 m しか確認できていない。幅 0.9 m、深さ 0.2 m ほどを測り、両サイドとも一段テラス状になる。(中森)

遺構外出土遺物 (図 40、図版 24 - 3 ~ 5、25)

当該期の遺構外から出土した遺物を掲載する。弥生時代中期後葉 (74・75) と弥生時代後期 (76

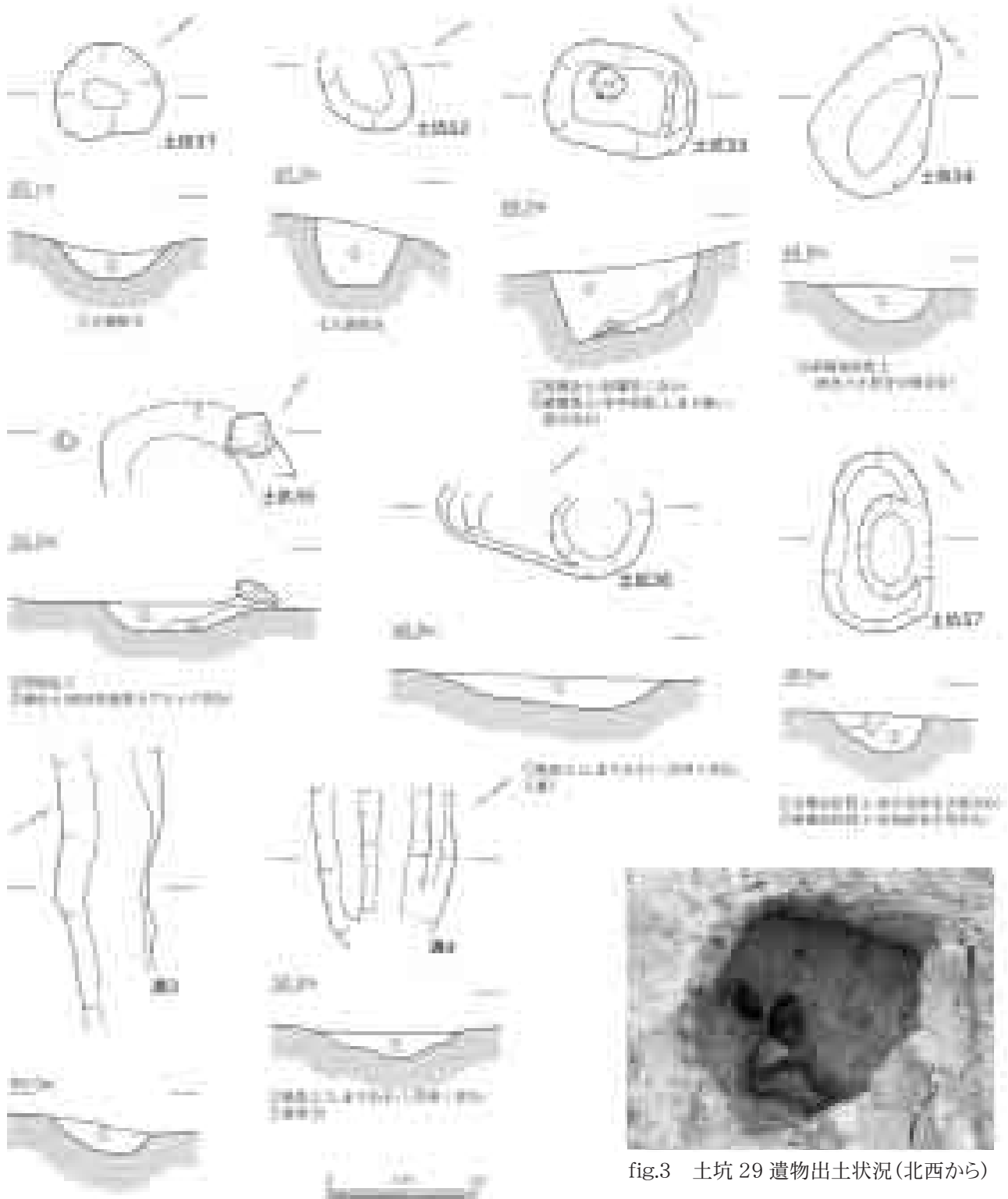


fig.3 土坑 29 遺物出土状況(北西から)

図 39 土坑 31～37、溝 3・4

～78)、終末期前半に属する遺物(80～82)はC・D区谷からの出土が多く、周辺にこの時期の集落があった可能性がある。これに対し、弥生時代終末期後半から古墳時代前期にかけての遺物(83～107)は、この時期の集落域であるA・B区谷周辺からの出土が多い傾向にある。中でも古墳時代前期前葉から中葉にかけての遺物出土量が多く、調査地周辺集落の盛期を反映している可能性がある。

(湯川)

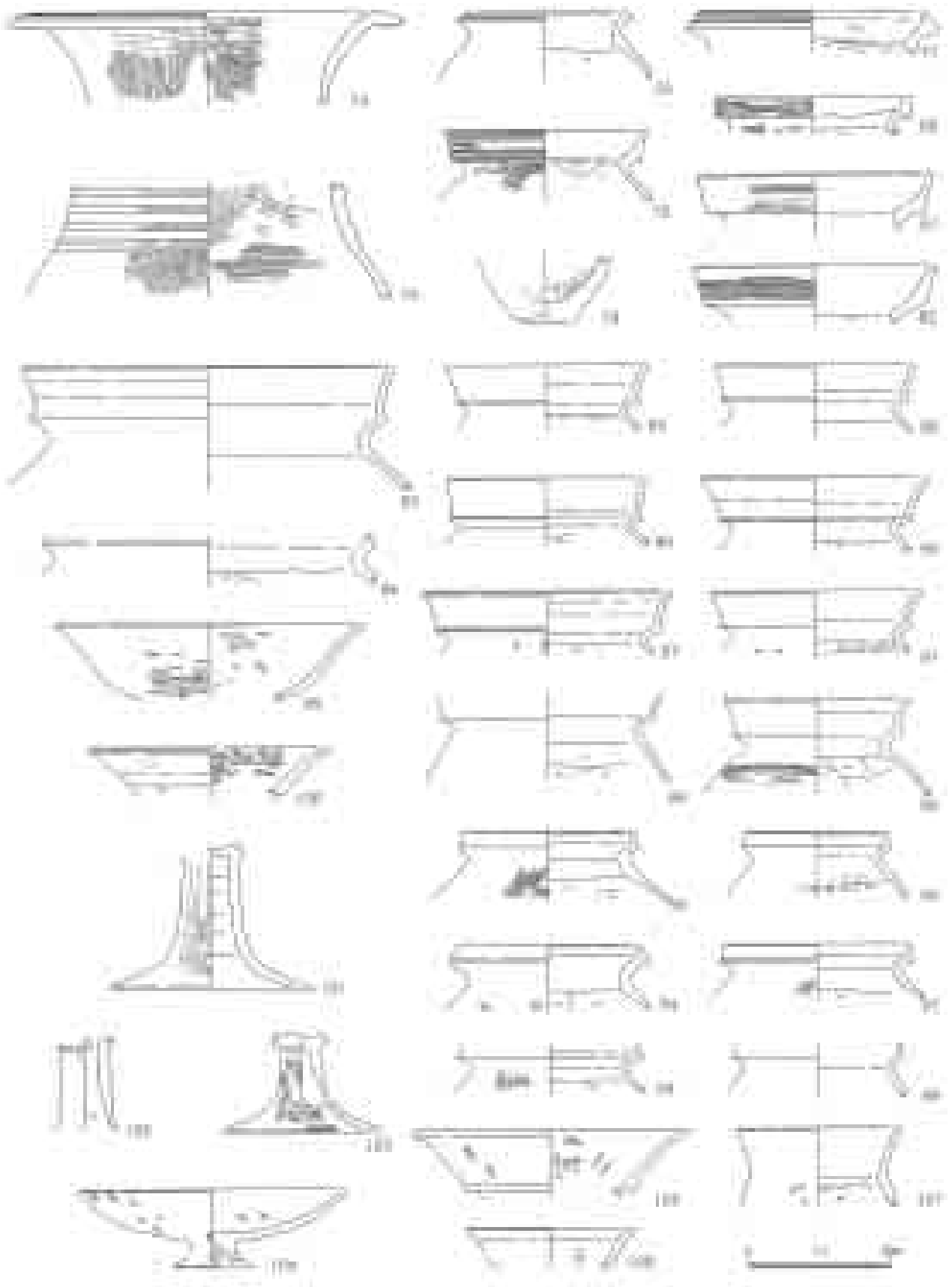


图 40 遺構外出土遺物

No	グリッド	土色	長軸・短軸、深さ	底面	No	グリッド	土色	長軸・短軸、深さ	底面	No	グリッド	土色	長軸・短軸、深さ	底面			
510	J9	X層	22.5-17.5	15.1	50.4	540	F7	X層	20.5-20.0	13.7	48.2	630	I10	X層	28.0-23.5	12.2	50.8
511	J9	X層	50.5-44.5	31.9	50.0	541	F7	X層	29.0-25.0	15.2	48.0	631	I10	X層	26.0-24.0	24.1	50.6
512	H8	X層	40.0-(18.0)	18.0	49.1	542	F7	X層	18.5-18.0	14.5	48.1	632	I10	X層	29.0-15.0	14.6	50.8
513	H8	X層	23.0-23.0	12.2	49.1	543	G7	X層	19.5-19.0	10.9	48.2	633	I10	X層	28.0-23.0	26.2	50.9
514	I10	X層	(32.5)-27.0	38.4	49.8	544	G7	X層	-	-	-	634	I10	X層	32.5-25.0	14.5	50.7
515	I10	X層	30.0-(24.0)	29.7	50.0	545	H8	X層	25.0-20.0	35.5	48.5	635	I10	X層	22.0-18.0	14.4	50.6
516	I10	X層	25.5-17.5	37.1	50.0	546	H8	X層	34.0-32.0	9.6	48.8	636	I10	X層	21.0-21.0	11.6	50.5
517	K10	X層	29.0-19.5	28.6	50.4	547	H8	X層	25.0-24.5	24.3	48.6	637	F3	V層	43.5-37.5	19.1	48.7
518	K10	X層	30.0-25.0	39.4	50.7	548	G7	X層	20.0-20.0	19.4	48.2	638	E3	V層	32.0-28.0	26.7	48.0
519	K9	X層	20.0-20.0	23.3	50.8	551	G7	X層	21.0-19.5	14.4	48.4	639	E3	V層	20.0-17.0	27.3	48.1
520	K9	X層	20.0-18.5	16.2	50.9	552	F7	X層	30.0-29.0	39.1	47.9	662	D3	V層	28.0-18.5	4.6	47.1
521	J10	X層	-	-	-	553	H8	X層	20.0-19.0	7.4	48.6	663	D2	V層	-	-	-
522	J10	X層	20.5-19.5	13.2	50.4	554	H9	X層	24.0-22.0	8.9	48.2	664	D3	V層	-	-	-
523	H8	X層	21.5-20.0	12.0	49.0	555	H9	X層	(25.0)-22.0	20.8	49.1	665	D3	V層	47.0-37.5	38.8	48.2
524	H8	X層	24.0-19.0	14.5	48.9	556	H9	X層	-	-	-	666	D3,4	V層	-	-	-
525	H8	X層	25.0-22.5	25.4	48.6	557	H9	X層	22.5-21.5	21.1	49.1	676	D3	V層	-	-	-
526	H8	X層	19.5-49.0	16.7	48.7	558	H9	X層	22.0-20.5	11.4	49.2	681	D3	V層	30.0-22.0	14.6	48.2
527	H8	X層	24.0-21.5	9.1	48.7	559	H8	X層	40.0-37.5	15.3	49.2	682	D3	V層	33.5-28.0	20.1	47.3
528	H8	X層	20.0-(18.0)	11.2	48.7	560	I9	X層	-	-	-	683	D3	V層	-	-	-
529	H8	X層	23.5-(21.5)	18.0	48.7	564	-	-	-	-	-	684	E4	V層	-	-	-
530	H8	X層	22.0-21.0	24.7	48.9	565	H8	X層	22.5-17.5	21.0	49.1	685	E4	V層	40.0-35.0	24.9	48.3
531	H8	X層	26.0-20.0	10.8	49.0	566	H8	X層	25.0-24.0	31.4	49.0	687	E4	V層	26.5-(18.0)	31.4	48.2
532	H8	X層	28.0-21.5	18.5	48.8	567	G5	V層	41.0-21.0	29.2	50.4	688	E4	V層	36.0-27.5	27.1	48.3
533	D2	V層	39.5-22.0	23.9	47.4	573	D3	V層	40.0-32.5	21.7	48.1	690	E4	V層	32.0-28.0	25.1	48.5
534	D2	V層	49.0-40.5	21.7	47.5	574	D3	V層	34.0-33.0	9.0	48.2	693	E4	V層	34.0-28.0	10.3	48.7
535	D2	V層	36.0-32.5	24.0	47.1	576	D3	V層	36.0-(30.0)	27.2	48.2	695	E4	V層	28.0-24.0	25.1	48.3
536	H8	X層	34.0-26.5	10.5	48.7	579	D3	V層	-	-	-	696	D4	V層	20.0-18.0	10.7	48.5
537	G8	X層	28.5-21.5	19.8	48.7	580	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
538	G8	X層	39.0-29.5	19.5	48.6	582	D3	V層	-	-	-	-	-	-	-	-	-
539	F7	X層	20.0-19.0	13.9	48.2	604	J9	X層	22.0-20.5	34.7	47.5	-	-	-	-	-	-

表6 弥生時代中期～古墳時代中期土器観察表

※：復元径、△残存値、()は底径

No.	図No	遺構・層位	器種	法量(cm)		特徴	胎土 焼成	色調	残存率	備考
				口径	器高					
34	23	集石1	土師器 甕	※15.2	△5.1	口縁下端部は尖り気味に突出。口縁端部は細くなり丸く収め、やや外反する。内外面ナデ、体部内面ケズリ。	やや粗 やや不良	内外 橙	口径 1/10	
35	23	V層	甕	—	△5.9	甕の体部片。焼成後穿孔される。外面ナデ、内面ケズリ。	やや粗 やや不良	にぶい黄橙- 褐灰 浅黄橙- 灰黄褐	—	
36	24	竪穴住居 1 上層	土師器 甕	※16.3	△4.4	口縁下端部はあまり突出しない。口縁端部は丸く収め、やや外反。全体風化のため調整不明。	やや粗 やや不良	内外 浅黄橙	口縁細片	
37	24	竪穴住居 1 下層	鉢	※12.5	△6.1	小型の鉢。口縁部はやや直立気味で、器壁は厚くなる。内面ケズリ、外面はナデ。胎土は粗い。	やや粗 やや不良	橙- 黒(黒斑)	口・底径 1/3	胎土分析資料1
38	27	竪穴住居 4 床直	土師器 甕	※14.4	△19.4	口縁下端部は段状に突出。口縁は外反し、端部は面取り。口縁部内外ナデ、体部は内面ケズリ、外面ハケ。外面に煤付着。	やや粗 やや不良	浅黄橙- 灰黄褐 - 灰- にぶい黄褐 浅黄橙- 褐灰	口径3/4	胎土分析資料20
39	27	竪穴住居 4 床直	土師器 甕	※28.0	△12.6	大型の甕。口縁下端部は尖り気味に突出。上端部は外側に肥厚する。肩部に多条平行沈線。口縁内外面ナデ、体部内面ケズリ。	やや粗 やや不良	内外 にぶい橙	口縁1/5	胎土分析資料24
40	27	竪穴住居 4 床直	土師器 鼓形器台	※18.5	△9.8	上下に段を有するタイプ。あまり突出せず、稜は甘い。器壁は薄く、口縁はわずかに外反する。全体に磨滅し、調整不明瞭。	粗 不良	にぶい黄橙 鈍い黄橙- 灰	口径1/3 底径1/5	
41	27	竪穴住居 4 床直	土師器 鼓形器台	19.5	△9.7	上下に段を有するタイプ。器壁は薄く、口縁はわずかに外反する。全体に磨滅し、調整不明瞭。	粗 不良	内外 にぶい黄橙	口径完存	胎土分析資料21
42	27	竪穴住居 4 床直	土師器 高杯	22.5	(14.9)	体部は丸みをもち、口縁は外反する。端部は丸く収める。杯部内外面ミガキ。脚部外面ハケメ。脚部は面取りする。	やや粗 やや良	にぶい黄橙 にぶい黄橙- 褐灰	口径2/3 定型1/2	底径 ※13.7 胎土分析資料22
43	27	竪穴住居 4 床直	土師器 低脚杯	16.8	7.2	杯部は丸みをもち、口縁は外反。外面ハケ、内面はハケ後ミガキか。脚部は八字状に開き、端部は面取り。	やや粗 やや不良	浅黄橙 にぶい黄橙	口径1/1	底径 8.9 胎土分析資料23
44	27	竪穴住居 4 溝E	土師器 甕	※16.2	△4.8	口縁下端部は下垂し突出。上端部は外側に肥厚し、丸く収める。内外面ナデ。外面に煤付着。	やや粗 やや不良	にぶい黄褐 浅黄橙	口径 1/10	
45	27	竪穴住居 4 溝E	壺	—	△5.7	口縁下端部は垂下する。内外面ナデ、頸部下外面ハケ、内面ケズリ。外面および割れ口にも煤付着。	やや粗 やや不良	内外 浅黄橙	頸部1/6	
46	31	竪穴住居 6 ①層	土師器 高杯	※15.3	△6.1	体部下位に段を有するもの。口縁は外反し、端部は丸く収める。内外面ナデ、屈曲部内面にミガキ。外面にはわずかにハケメ。	やや粗 やや不良	内外 橙	口径1/2	胎土分析資料2
47	31	竪穴住居 6 ①層	土師器 高杯	(13.4)	12.0	有段高杯。段の稜線はやや不明瞭。内面ミガキ、外面にはわずかにハケメ。内面に「ラ」字状の刻線。脚部に円形透かしをもつ。	やや粗 やや不良	浅黄橙 にぶい黄橙	底径完存	胎土分析資料7
48	31	竪穴住居 6 ①層	土師器 壺	—	△5.6	頸部に貼付突帯をもち、突帯上には連続刻みが施される。内外面ナデ。	やや粗 やや不良	内外 浅黄橙	頸部1/5	胎土分析資料3
49	31	竪穴住居 6 ①層	土師器 甕	10.0	△5.0	小型の甕。口縁下端部は突出。口縁中位の器壁が厚く、端部は細くなりながら丸く収める。内外面ナデ。体部内面ケズリ、外面ハケ。	やや粗 やや不良	内外 浅黄橙	口径1/6	
50	31	竪穴住居 6 ①層	土師器 甕	16.4	△11.9	口縁は直立気味で、下位は凹線状に窪み下端部がある。上端部は器壁厚く、外側が面取り。内外面ナデ。体部内面ケズリ、外面ハケ。	やや粗 やや不良	内外 にぶい黄橙	口径1/6	胎土分析資料8
51	29	竪穴住居 6 溝D	土師器 甕	※15.2	△6.4	口縁は長く、外反。下端部は突出する。上端部は外側に張り出す。内外面ナデ、体部内面ケズリ。	やや粗 やや不良	橙 にぶい黄橙	口径1/8	
52	29	竪穴住居 6 溝D	土師器 甕	※15.0	△4.5	口縁下端部は突出し、上端部は丸く収める。磨滅し調整不明。	やや粗 やや良	内外 明黄褐	口径1/8	
53	30	竪穴住居 6 下層	土師器 直口壺	12.9	10.1	口縁はわずかに外反し、端部は尖り気味になる。内外面ナデ。体部は丸みをもち、外面ハケ、内面ケズリ。外底部煤付着。	やや粗 やや不良	内外 浅黄橙	ほぼ完存	胎土分析資料6
54	30	竪穴住居 6 下層	土師器 甕	17.1	△7.6	口縁下端部は突出し、丸みをもち、口縁部は外反し、上端部は丸く収める。外面肩部に波状文。磨滅し調整不明。	やや粗 やや不良	内外 浅黄橙	口径1/6	胎土分析資料4
55	30	竪穴住居 6 床直	土師器 小型器台	※10.0	△2.4	有段の小型高杯。口縁は外反し、端部面取り。内外面ナデ、体部外面ハケ。	やや粗 やや不良	内外 浅黄橙	口径1/3	
56	30	竪穴住居 6 下層	土師器 高杯	17.5	△5.7	緩やかに湾曲する杯部。口縁はわずかに外反し、端部は丸く収める。外面ハケ、内面は調整不明。57と同一個体。	やや粗 やや不良	内外 橙	口径1/3	胎土分析資料5
57	30	竪穴住居 6 下層	高杯 脚部	(10.9)	△7.2	56の脚部。脚部は八字状に開き、内外面ハケメ。	やや粗 やや不良	内外 橙	脚部完存	
58	33	竪穴住居 7 下層	土師器 甕	※16.2	△26.0	口縁は外傾し、上端部丸く収める。下端部は突出し、明瞭な稜をもつ。内外面ナデ。外面肩部に3-4条波状文。体部外面ハケ、内面ケズリ。体部外面下半に煤付着、内面下1/3炭化物付着。	やや粗 やや不良	内外 橙	口径1/2 全体1/3	胎土分析資料10
59	33	竪穴住居 8	土師器 低脚杯	22.0	△5.2	皿状の大型杯。体部丸みをもち、口縁は外反。端部は面取りする。内外面ミガキ。	やや粗 やや良	浅黄橙 にぶい黄橙	口径1/2	胎土分析資料9
60	33	竪穴2	土師器 小型 丸底壺	※9.6	△13.5	口縁下端部はわずかに屈曲する。上端部は細く、やや外反。内外面ナデ。体部外面ハケ、内面ケズリ、下部には指頭圧痕。体部外面煤付着。	やや粗 良	内外 淡橙	全体4/5	胎土分析資料14
61	35	竪穴住居 9b 床直	土師器 壺	19.6	33.0	口縁は大きく外傾。下端部は突出し稜が明瞭。上端部は外側に張り出す。口縁から頸部ナデ。肩部外面に二枚貝刺突文があるが、全周はしない。外面ハケ、内面ケズリ。口縁と体部の一部に黒斑。	やや密 やや良	内外 橙	全体3/5	胎土分析資料13
62	35	竪穴住居 9b P2	土師器 甕	※17.6	△24.5	口縁下端部は突出。口縁は外傾し、上端部は面取り状。内外面ナデ。体部外面ハケ、内面ケズリ。外面下半に煤付着、内面下1/4炭化物付着。	やや粗	内外 赤褐	全体3/5	胎土分析資料12

第5章 弥生時代～古墳時代中期の調査

No.	図No	遺構・層位	器種	法量 (cm)		特徴	胎土 焼成	色調	残存率	備考
				口径	器高					
63	35	竪穴住居9b 床直	土師器 甕	16.6	△15.2	口縁下端部は突出。口縁は外傾し、上端部は外側に張り出す。内外面ナデ。外部外面ハケ、内面ケズリ。	やや粗 やや不良	内外 淡橙	全体 1/2	
64	35	竪穴住居9b 床直	土師器 甕	※12.4	△7.0	口縁下端部は突出するが稜は甘い。口縁外傾し、上端部丸く収める。内外面ナデ。内部内面ケズリ。	やや粗 良	内外 淡橙	口径 1/8	胎土分析資料 16
65	36	竪穴住居9b 上層	土師器 甕	※14.4	△4.4	口縁下端部尖り気味に突出。口縁やや外反し、上端部は面取り気味。内外面ナデ。外面煤付着。	やや粗 やや不良	内外 橙	—	
66	36	竪穴住居9b 上層	甕	※13.0	△3.2	口縁下端部尖り気味に突出。口縁は外傾、上端部は面取り気味。内外面ナデ。	やや粗 やや不良	内外 にぶい橙	—	
67	36	竪穴住居9b 上層	高杯	—	△2.0	磨減し調整不明。	やや粗 やや良	内外 橙	—	
68	36	竪穴住居9b 上層	高杯	—	△3.1	体部丸みをもつ。外面ハケメ。	やや粗 やや不良	内外 橙	—	
69	36	竪穴住居9b 下層	高杯	—	△3.3	体部丸みをもつ。内面ミガキ。外面ナデ。	やや粗 やや不良	内外 橙	—	
70	36	竪穴住居9b 上層	甕	—	△11.7	丸みをもつ体部。外面ハケ、内面ケズリ。外面煤付着。	やや粗 やや良	淡橙-灰褐 淡橙	最大径 1/3	
71	36	竪穴住居9b 上層	土師器 小型丸底壺	—	△4.6	丸みをもつ体部。外面ハケ、内面ケズリ、指頭圧痕。外面煤付着。	やや粗 良	内外 にぶい橙	最大径 1/3	胎土分析資料 17
72	38	土坑 28	高杯	※11.6	△2.7	外面ハケ。	やや粗 やや不良	内外 浅黄橙		
73	38	土坑 28	小型丸底壺	—	△3.5	体部上位に最大径をもつ。外面ナデ、一部にハケ。内面ケズリ。	やや粗 やや不良	内外 橙		
74	40	J 8 X層	弥生土器 壺	※24.0	△6.6	口縁は大きく開き下垂。端部欠損。内面に凹線が巡る。内外面ハケ。	やや密 やや良	内外 橙	—	
75	40	I 9 X層	弥生土器 壺	—	△8.0	壺の頸部。内外ハケで、外面はハケ後凹線を巡らす。	やや密 やや良	内外 橙	—	
76	40	竪穴住居9 上層	弥生土器 甕	※10.8	△4.7	口縁はわずかに上下に拡張。端部に凹線。内外面ナデ、頸部以下内面ケズリ。	やや密 やや良	内外 橙	口径 1/8	
77	40	H 8 X層	弥生土器 甕	※15.6	△3.0	口縁は上方に拡張され凹線が巡る。	やや粗 やや不良	内外 橙	口径 1/8	
78	40	F 7 IX層	弥生土器 甕	※14.4	△5.1	口縁は下端部がやや下垂し、多条の凹線が巡る。頸部には貝殻腹縁文。外面に煤付着。	やや粗 やや不良	にぶい黄橙 浅黄橙	口径 1/4	
79	40	F 7 X層	弥生土器 底部	4.8	△4.5	外面は調整難、内面ケズリ。	やや密 やや良	にぶい黄橙-褐灰 にぶい黄橙	底径完存	
80	40	F 7 X層	弥生土器 甕	※13.6	△3.0	口縁はやや上下に拡張され、櫛形平行線が巡る。頸部に貝殻腹縁文。内外ナデ、頸部以下内面ケズリ。	やや粗 やや不良	にぶい赤褐 浅黄橙	—	
81	40	D 3 VII層	弥生土器 甕	※16.5	△4.1	口縁は下端部がやや下垂し、多条の凹線が巡る。凹線はナデ消し。	やや粗 やや不良	内外 にぶい黄橙	—	
82	40	E 6 X層	弥生土器 甕	※17.0	△3.7	口縁は外傾し、端部は尖り気味になる。外面に平行沈線が巡り、上部はナデ消し。	やや粗 やや不良	内外 浅黄橙	—	
83	40	F 3 X層	土師器 甕	※25.4	△8.9	口縁端部は尖り気味に突出。上端部は面取り。内外面ナデ。	やや粗 やや不良	内外 にぶい黄橙	口径 1/6	
84	40	E 2 X層	土師器 甕	—	△3.5	口縁下端部は尖り気味に突出。内外面ナデ、頸部以下内面ケズリ。外面頸部の一部に煤付着。	やや粗 やや不良	灰黄褐 浅黄橙	—	
85	40	G 8・9 X層	土師器 甕	※14.4	△4.7	口縁下端部は突出。口縁は外傾し、上端部は丸く収める。内外面ナデ。	やや密 やや良	内外 浅黄橙	—	
86	40	E 6 X層	土師器 甕	※13.7	△4.8	口縁下端部は突出。口縁は直立気味。上端部は丸く収める。内外面ナデ。	やや密 やや良	内外 浅黄橙	口径 1/4	
87	40	E 3 V層	土師器 甕	※17.4	△4.2	口縁下端部はやや突出し、その上は凹線状。上端部は丸く外側に張り出す。内外ナデ。外部外面ハケ、内面ケズリ。外面に煤付着。	やや粗 やや不良	内外 にぶい黄橙	口径 1/5	
88	40	E 2 III層	甕	—	△5.8	口縁下端部は突出。口縁は外傾する。内外面ナデ。頸部以下内面ケズリ。	やや粗 やや不良	内外 淡橙	口径 1/5	
89	40	E 3 V層	土師器 甕	※12.8	△4.4	口縁下端部は突出。口縁は外傾し、上端部は丸く収める。内外面ナデ。	やや粗 やや不良	内外 淡橙	口径 1/5	
90	40	E 3 V層	土師器 甕	※16.1	△5.3	口縁下端部は下垂気味に突出。口縁は外傾し、上端部は丸く収める。内外面ナデ。外面に煤付着。	やや粗 やや不良	内外 にぶい橙	口径 1/5	
91	40	G 8 IX層	土師器 甕	※14.3	△4.4	口縁は短く外反。下端部は尖り気味に突出、上端部は面取り。内外面ナデ、外部外面ハケ、内面ケズリ。外面に煤付着。	やや粗 やや不良	内外 浅黄橙	口径 1/5	
92	40	H 8 X層	土師器 甕	※12.6	△6.7	口縁は外反し上端部丸く収める。下端部は突出しない。肩部にキザミ目。外面煤付着。	やや粗 不良	内外 橙褐	口径 1/6	
93	40	G 7 IX層	甕	※11.9	△4.9	口縁は短く内傾。上端部丸く収める。内外面ナデ。外部外面ハケ、内面ケズリ。	やや粗 良	内外 にぶい黄橙 -黄灰	口径 1/7	
94	40	F 7 X層	土師器 壺	※12.2	△4.7	口縁は短く内傾。上端部丸く収める。内外面ナデ。外部外面ハケ、内面ケズリ。	やや粗 やや不良	内外 浅黄橙	—	
95	40	E 3 V層	甕	—	△3.2	口縁は短く内傾。上端部欠損。内外面ナデ。外部外面ハケ、内面ケズリ。外面に煤付着。	やや粗 やや不良	内外 にぶい橙	—	
96	40	G 4 IX層	甕	※9.9	△4.7	口縁は短く内傾。上端部はやや厚気味に丸く収める。内外面ナデ。外部外面ハケ、内面ケズリと指頭圧痕。	やや粗 やや不良	内外 にぶい黄橙	—	
97	40	G 7	甕	※12.8	△3.8	口縁は短く内傾。上端部丸く収める。内外面ナデ。外部外面ハケ、内面ケズリ。	やや粗 やや不良	内外 にぶい橙	口径 1/8	
98	40	H 7 X層	甕	※11.6	△3.9	口縁は直立し、下端部の稜は甘い。外面に多条平行沈線があり、ナデ消し。	やや密 やや良	内外 にぶい黄橙	口径 1/5	
99	40	E 3 IV層	低脚杯	※21.7	△5.5	体部緩やかに湾曲し、口縁外反。端部は面取りする。内外面ミガキ。	やや密 やや不良	内外 にぶい橙	口径 1/10	
100	40	E 3 V層	土師器 高杯	※16.8	△3.8	体部下端でやや屈曲。口縁端部は外反する。内面ミガキ顕著。	やや粗 やや不良	にぶい黄橙 にぶい黄褐	口径 1/10	
101	40	E 6 X層	土師器 高杯	(※14.2)	△10.4	脚部は緩やかに大きく開く。端部は丸く収める。外面ハケ後ナデ。	やや粗 やや不良	内外 にぶい黄橙	底径 1/3	
102	40	F 7 X層	土師器 高杯	※4.0	△6.4	磨減し調整不明。	粗 不良	黄橙-橙 黄橙	—	
103	40	E 2 V層	土師器 高杯	(※11.1)	△6.9	脚は大きく開き、端部先細り気味。外面ハケ後ミガキ。脚部に円形透かし2。	やや粗 やや不良	にぶい橙	底径 1/6	
104	40	E 3 IV層	土師器 低脚杯	※20.6	5.6	緩やかに湾曲する環部。外面ハケ、内面はミガキ。脚部に円形透かし。	やや密 やや不良	黄橙 浅黄橙	口径 1/8 底部完存	胎土分析資料 26
105	40	F 3 IV層	土師器 鼓形盤台	※19.2	△4.5	有段の器台。口縁端部は外反。外面ハケ、内面はミガキ。	やや密 やや不良	内外 浅黄橙	—	
106	40	E 3 IV層	鉢?	※11.7	△3.3	小型のもので、丸みをもつ体部から口縁が短く外反する。外面ナデ、内面はケズリか。	やや粗 やや不良	内外 浅黄橙	—	
107	40	竪穴住居11 上層	土師器 小型丸底壺	※11.5	△5.2	口縁は直線的に外傾し、端部は尖り気味。内外面ナデ。体部は外面ハケ、内面ケズリ。	やや粗 やや不良	にぶい橙	口径 1/5	

表7 弥生時代終末～古墳時代前期石製品観察表

No.	遺構・層位	図No.	種別	法量 (cm), g (kg)				材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚	重さ		
S5	竪穴住居6 下層	30	金床石	29.4	27.3	12.9	16.5kg	角閃石安山岩	被熱のため赤化、鉄分付着、 敲打痕・磨面有
S6	竪穴住居9 P 3	35	礎盤石	41.7	30.1	8.8	15.9kg	安山岩	被熱のため赤化、鉄分付着、磨 り面・敲打痕有・磨面有、4つ に割れる
S7	竪穴住居9 P 4	35	礎盤石	21.6	29.1	7.3	9.08kg	角閃石安山岩	磨り面・敲打痕有、鉄分付着、

第6章 古墳時代後期～古代の調査

第1節 概要 (図41)

本章で扱う時期は大きく古墳時代中期後葉～後期と古代に分かれる。前者は調査区によって様相が違い、A・B区においては竪穴住居を主体とする。これらは前時期の住居と異なり、谷から上がった丘陵平坦部につくられている。またC・D区の谷部では耕作に関連すると考えられる、谷地形に沿って縦横にはしる溝群を検出した。

後者はA区谷部北端で検出した土器溜と、D区南東端の土坑38のみである。両者の時期は異なっており、さらに遺構外からも当該期の遺物はほとんどみられないため、これらを位置づけることは出来ない。(中森)

第2節 検出した遺構と遺物

竪穴住居 10・11 (図42～44、図版26・27)

調査地北東部、C3・4、D3・4グリッドに位置する。表土直下、基盤層上面で検出した。A・B区の谷と、C・D区の谷の間の尾根頂部にあたり、旧地形は周辺より標高が高かったため、後世の削平を受けたと考えられる。竪穴住居10・11の関係は、軸を同じくする竪穴住居11が10を切り、入れ子状に構築されている。いずれも、平面形態は隅丸方形を呈する。

竪穴住居10は、中心部を竪穴住居11に切られており、床面が残存するのは壁際のみである。床面からは、溝が3条検出された。いずれも、住居壁面に並行することから周壁溝であり、土層断面の観察とあわせ、最低3回の拡張を想定した。古い内側から竪穴住居10a・10b・10cと呼称する。これらの支柱穴は、竪穴住居11により、床面が削平されているため明確な対応関係はとれない。しかし、



図41 古墳時代後期～古代遺構分布

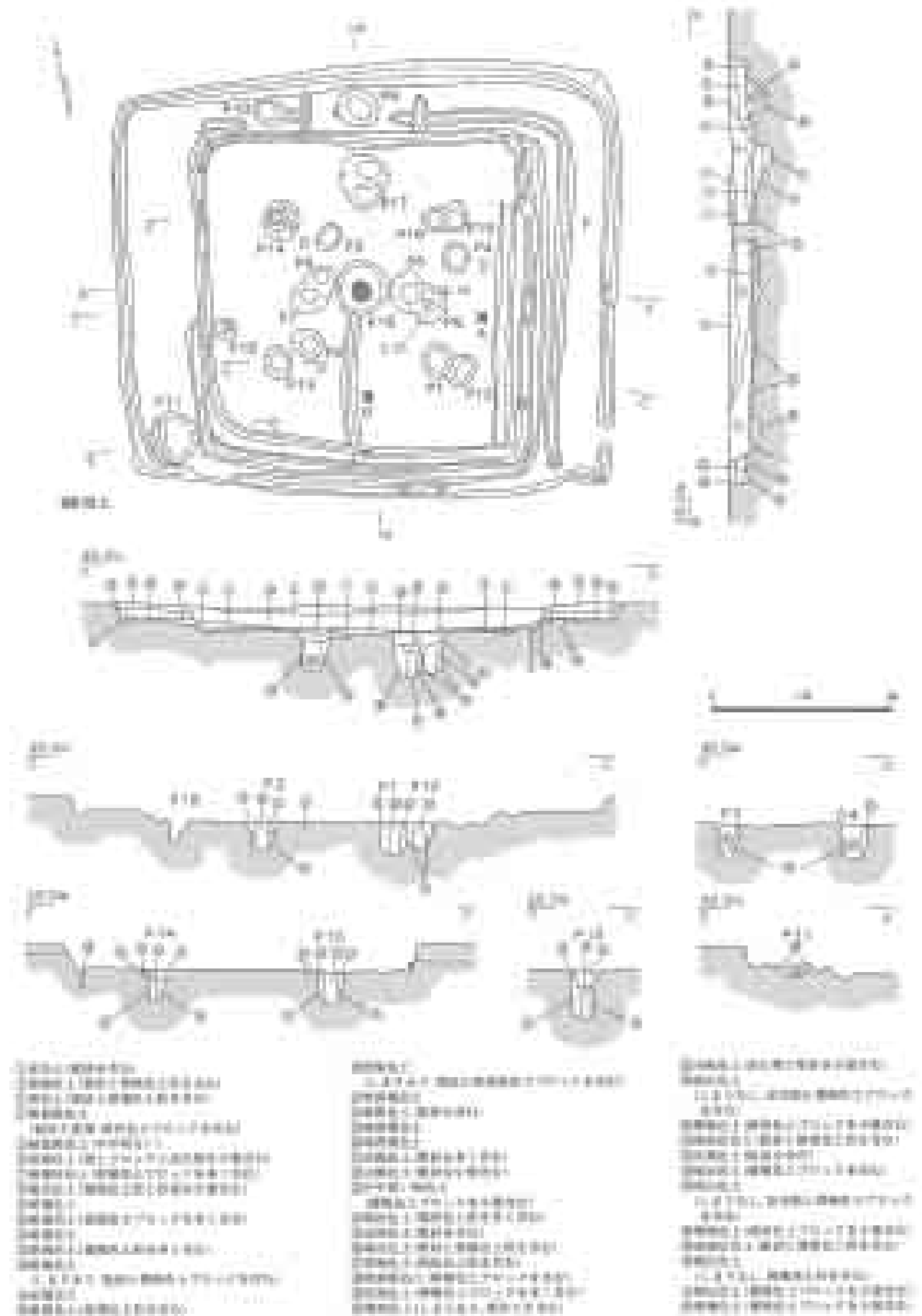


図42 竪穴住居 10・11

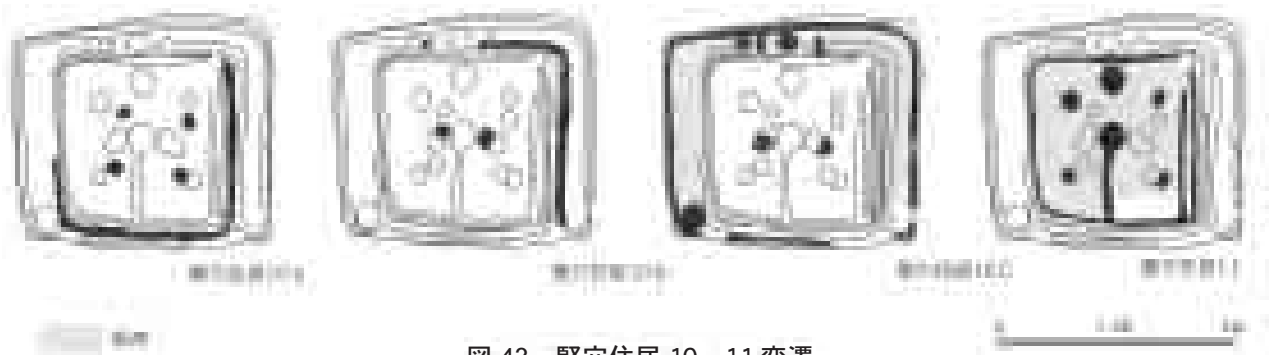


図 43 竪穴住居 10・11 変遷

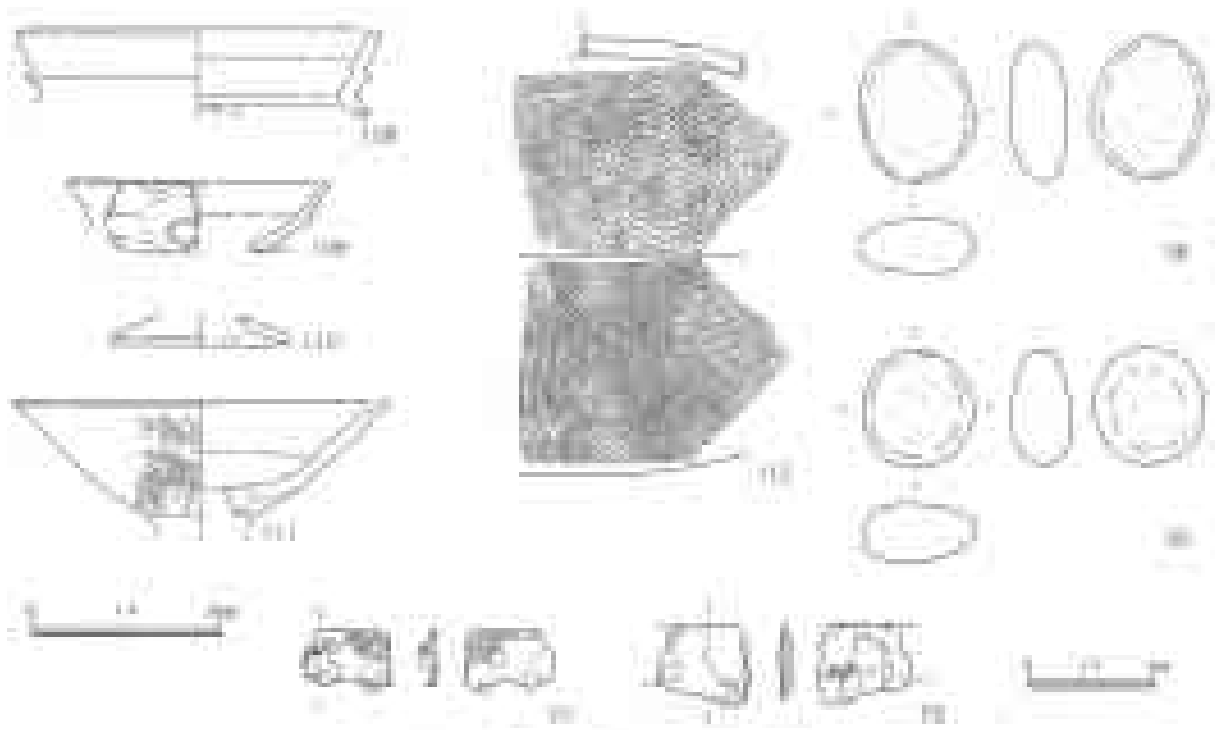


図 44 竪穴住居 10・11 出土遺物

ピットの切り合い関係と支柱穴間の主軸方向から、ある程度の推定は可能である。

竪穴住居 10 a は、周壁溝 (③層) が約 3 / 4 残存しているのみで、その大半を竪穴住居 10 b・10 c・11 に切られている。残存しない周壁溝南西部も、本来は全周していたと推測する。長軸約 3.8 m、短軸約 3.7 m を測る。他住居に比べ、軸がやや東に振れる。支柱穴は、切り合い関係から P 1～4 および、P 5・6 の組み合わせが考えられる。軸方位と色調が近いことから、前者と推定した。

竪穴住居 10 b は、南・西辺の周壁溝 (③層) が残存しているのみで、その大半を竪穴住居 10 c・11 に切られており、正確な規模は不明である。支柱穴は、切り合い関係から P 1～4 および、P 5・6 の組み合わせが考えられる。軸方位と色調が近いことから、後者と推定した。

竪穴住居 10 c は、中央部を竪穴住居 11 に、北西部を土坑 39 に切られる。長軸約 5.6 m、短軸約 4.7 m、検出面から床面までは最深で約 0.3 m を測る。床面には貼床 (③層) が施されており、床面の標高は約 48.4 m、床面積は 39.4㎡ を測る。床面からは、ほぼ全周する周壁溝と、P 9～11、P 9 両脇で南北方向の溝 2 条を検出した。P 9～11 は断面形態が、U 字状あるいは皿状を呈し、柱痕跡や柱抜き取り痕跡なども確認できなかったことから、屋内貯蔵穴など、柱穴以外の機能が想定できる。



fig.4 竪穴住居 12 (東から)

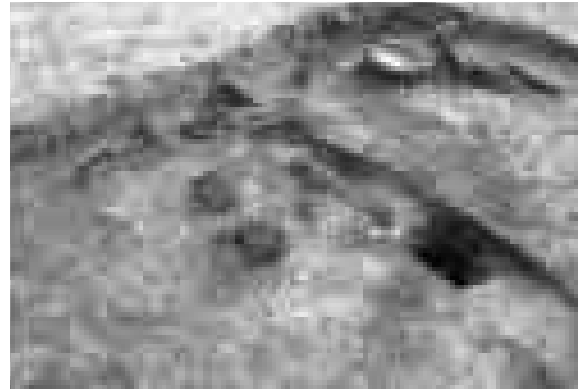


fig.5 床面遺物出土状況 (北東から)

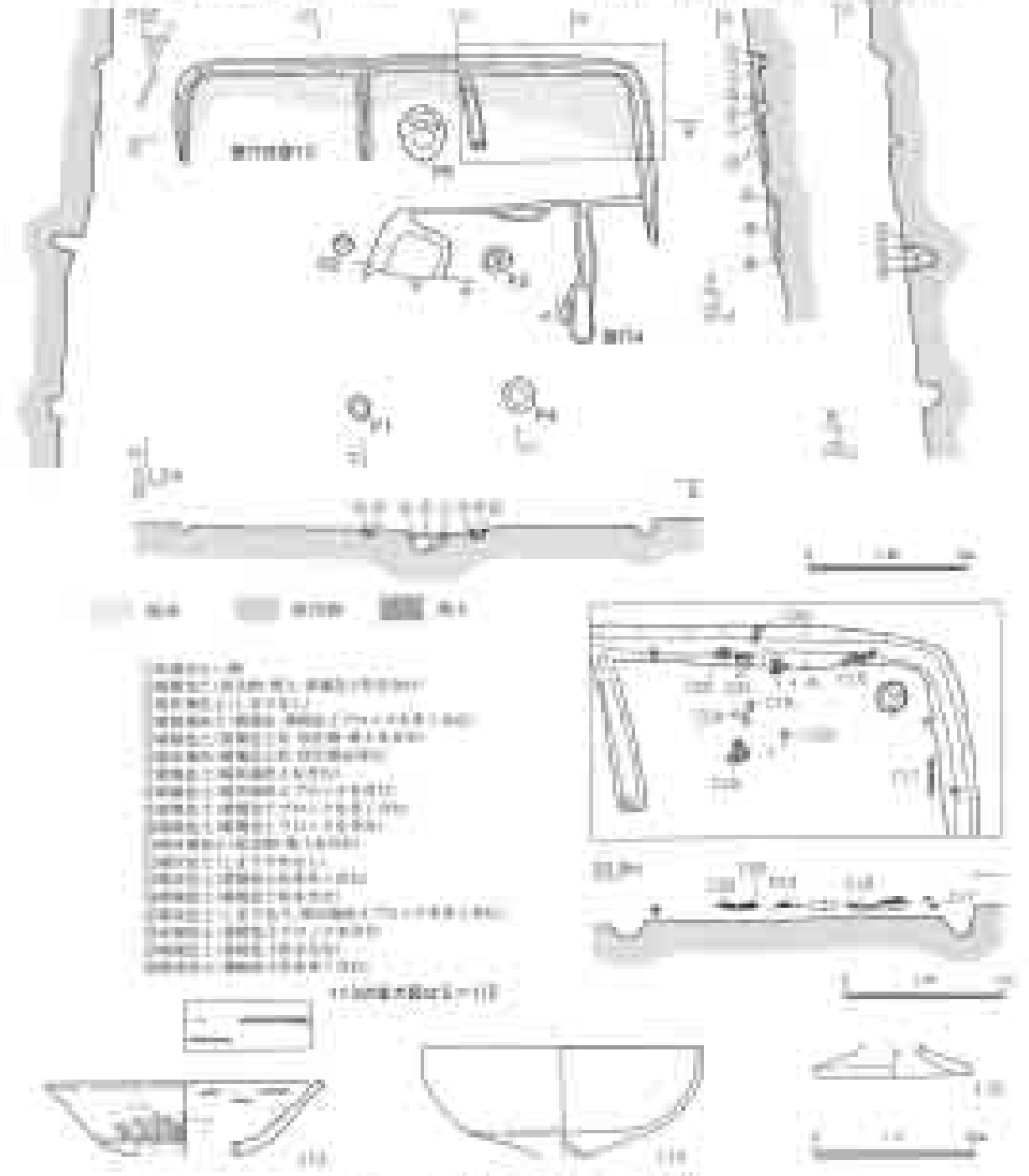


図 45 竪穴住居 12 および出土遺物

支柱穴は、切り合い関係からP1～4およびP7・8の組み合わせが考えられる。軸方位と色調が近いことから、後者と推定した。P8柱痕(㊸層)からは、柱材の可能性のある炭化材(C14・15)が出土しており、分析の結果、スタジイと判断されている。(第10章6)。竪穴部から、少量の遺物が出土している。110は、古墳時代中～後期の高杯脚部である。出土遺物と形態、切り合い関係から、古墳時代中期後葉に廃絶した竪穴住居と判断した。

竪穴住居11は、竪穴住居10を切って構築される。長軸約3.6m、短軸約3.6m、検出面から床面までは最深で約0.4mを測る。床面には貼床(㊸層)が施されており、床面の標高は約48.3m、床面積は12.35㎡を測る。床面からは、ほぼ全周する周壁溝と、P12～15・17を検出した。P12～15は、柱痕跡を有し、その配置から支柱穴と判断した。P17は南辺中央部に位置し、北側には浅いテラス部が付属する。また、床面中央に被熱し炭化した部分を検出した。この周辺には炭化物も集中しており、地床炉の可能性もある。貼床除去後、西辺付近に溝A、中央部にP16、P16から北に延びる溝B、および、竪穴住居10関連のピット群を検出した。これらの溝は、竪穴住居10関連とするには深すぎることになるため、本遺構に付属すると判断した。P16は、溝Bと一連の可能性が高いことから、同じく本遺構に付属すると判断した。竪穴部の埋土は、4層に分層した。④層は、検出面標高の低い北側にのみ堆積しており、地山質土のブロックを含むことから、人為的に動かされた可能性がある。竪穴部からは、少量の遺物が出土している。108・109・111・F1・F2は㊸層、112は㊹層、S8・S9は西辺周壁溝からの出土である。108は土師器甕、111は土師器高杯で、古墳時代中期後葉(笹尾山2期)。109は土師器高杯もしくは杯で、把手が付属すると考えられる。112は須恵器横瓶で、縦方向にカキ目が施される。F1は釜と考えられる鉄製品で、上半部には木質が残存し、下端には鋸歯が観察できる(図版27-3)。F2は、鎌基部と推定される鉄製品である。出土遺物から、古墳時代中期後葉から後期前葉にかけて廃絶した住居と推定している。(湯川)

竪穴住居12・竪穴4(図45、図版28・29 1・2)

調査地東部、G2・3グリッド、B区の谷東側の尾根部に位置する。IV層直下、基盤層上面で検出した。竪穴住居12が、竪穴4を切って構築されている。

竪穴住居12は、北半が流失もしくは削平されており、正確な平面形態は不明である。残存する南辺は約6.0m、検出面から床面までは最深で約0.1m、床面の標高は約49.7mを測る。残存する床面には、貼床(㊸層)が施されており、周壁溝と、P5、P5両脇で南北方向の溝2条を検出した。P5は南辺中央部に位置し、南側には浅いテラス部が付属する。支柱穴は、床面が削平されているため明確な対応関係はとれない。しかし、竪穴部との位置関係からP1～4を抽出した。

竪穴部埋土の残存する南西部において、床面直上とやや浮いたレベルから、炭化材と炭土を多数検出した。棒状(C17・18・21・22)を呈するものが多く、中には板材(C19・25)と考えられるものも検出された。この状態から、本遺構は炭化住居であり、これらの炭化材は住居構築材の一部と判断した。樹種同定の結果、スタジイ(C17・19・20・21)、が多く、その他、ツバキ属(C25)・エゴノキ属(C18)といった住居構築材に適した強度の高い樹種が大半を占めていた。

床面直上から、少量の遺物が出土している。113は土師器高杯で、内面に、液状の圧痕が2条存在する。114も土師器高杯で、杯部のみが正位で出土しており、脚部は折り取られた可能性がある。いずれも、古墳時代中期中葉から後葉にかけての遺物である。

出土遺物から、古墳時代中期中葉から後葉にかけての竪穴住居と判断した。

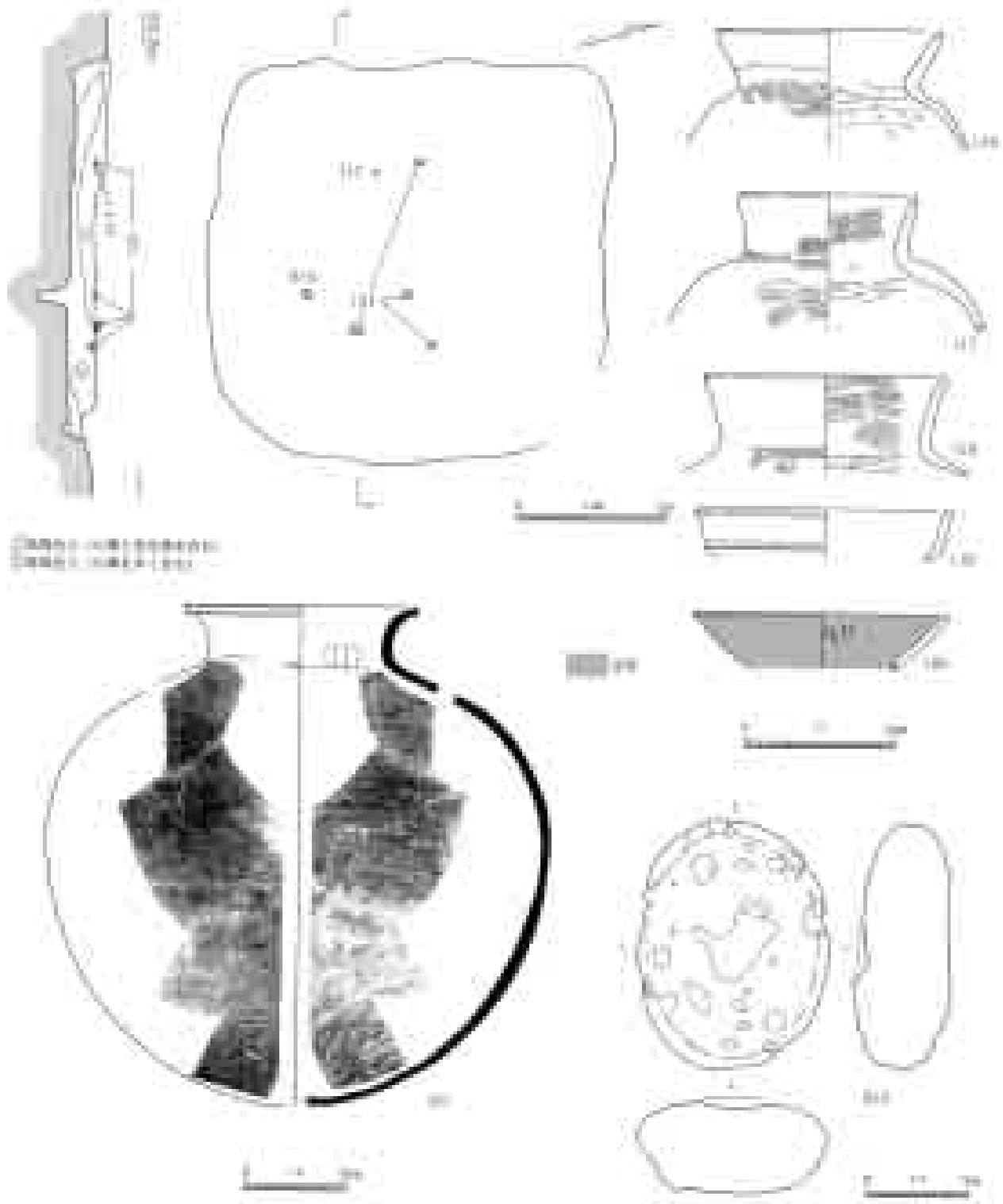


図 46 竪穴住居 9 上層遺物出土状況および遺物

竪穴4は、北半が流失あるいは削平されており、正確な平面形態は不明である。残存する北辺は約4.2 m、検出面から床面までは最深で約0.1 m、床面の標高は約47.5 mを測る。床面からは、東端に土坑状の落ち込み、南辺中央と西側に溝を検出した。南壁は、竪穴住居12に切られているが、それより西には広がらない。また、埋土も類似しており、竪穴住居12と関連する遺構の可能性もある。遺物は出土していない。

竪穴住居12に切られており、埋土が類似することから、当該期の竪穴として報告する。(湯川)
竪穴住居9上層(図46、図版29 3・5)

調査地東、B区谷の底部、F3・4グリッド位置する。竪穴住居9上層(①・②層)から、古墳時代中期後葉～後期の遺物が、まとまって出土した。この層は、レンズ状に堆積し、人為的に掘り込まれた痕跡が認められない。したがって、古墳時代前期中葉に廃絶した竪穴住居9が埋まりきっていない窪地に廃棄されたと考えている。

116～118は単純口縁、119はの複合口縁の土師器甕である。120は土師器高杯で、内外ともに赤色塗彩が施される。これらは、古墳時代中期後葉に位置づけられる。121は須恵器甕で、底部付近の外面には格子目タタキ、内面には、同心円の当て具痕跡が残るが、他の体部はナデ消されている。焼成は不良で、色調は暗赤色を呈する。口縁形態から古墳時代後期以降のものとして推測した。S10は凹み石で、中央部に敲打による凹みがある。(湯川)

溝群(図47、図版30)

C・D区谷部のⅩ層上面で検出した。谷に沿って直線的な溝(溝a・b)が37 mほどはしり、それに直交するものがほぼ等間隔に並ぶ。ただこれら溝は同一面で検出したが、その埋土は黒褐色土と灰褐色土の二種あり、前者が後者を切る。前者は溝aが約29 mで、ほぼ南東側においてのみこの溝に直交するものがみられる。直交溝は最大で長さ約8 mを測り、1.8～2.4 mほどの間隔にある。一方後者の溝bは長さ約15 mであるが、その南には同埋土の溝cがあり、あるいは一連のものと考えられる。そうであればその長径は25.5 mほどとなる。溝b・cに直交する溝の間は1.5～3.5 mとやはり規則的な間隔が見出せない。しかしいずれも幅0.2 m前後、深さ0.1 m未満のものである点は共通する。この土壌分析を行なった結果、Ⅹ層中からC・D区においてはもっとも多いプラント・オパールが検出されている。また花粉分析では比較的乾燥した状態とのことであり、乾田であった可能性が考えられようか。Ⅹ層中にほとんど遺物を含まないため時期決定は難しいが、検出面から概ね古墳時代後期～古代のものできよう。(中森)

土坑38(図48、図版31 3～5)

K9杭の西に位置し、径0.6 mほどの円形を呈すもの。上面は後世に削平された可能性があるため、深さは0.05 mと非常に浅い。土坑の西側底面近くから、土圧でつぶれたような状態で2個体の土師器杯が出土した。その特徴から9世紀前半のものに比定できるが、調査地内から当該期のものはほとんど出土しておらず、特異な存在といえる。(中森)

土器溜(図49・50、カラー図版7 1、図版31 1・2)

D3グリッド、A区谷部北側斜面のⅣ層下面から土器がまとまって出土した。斜面上部には土師器甕(130・131)、皿および蓋(127・128)があり、そこから下がって土師器杯(124～126)、須恵器杯(129)が出土している。この土器の周囲において明確な掘り形などは確認できなかった。しかし、土師器甕(131)は口縁から体部上位1/3ほどの破片でそのほかの部位がなかったこと、また

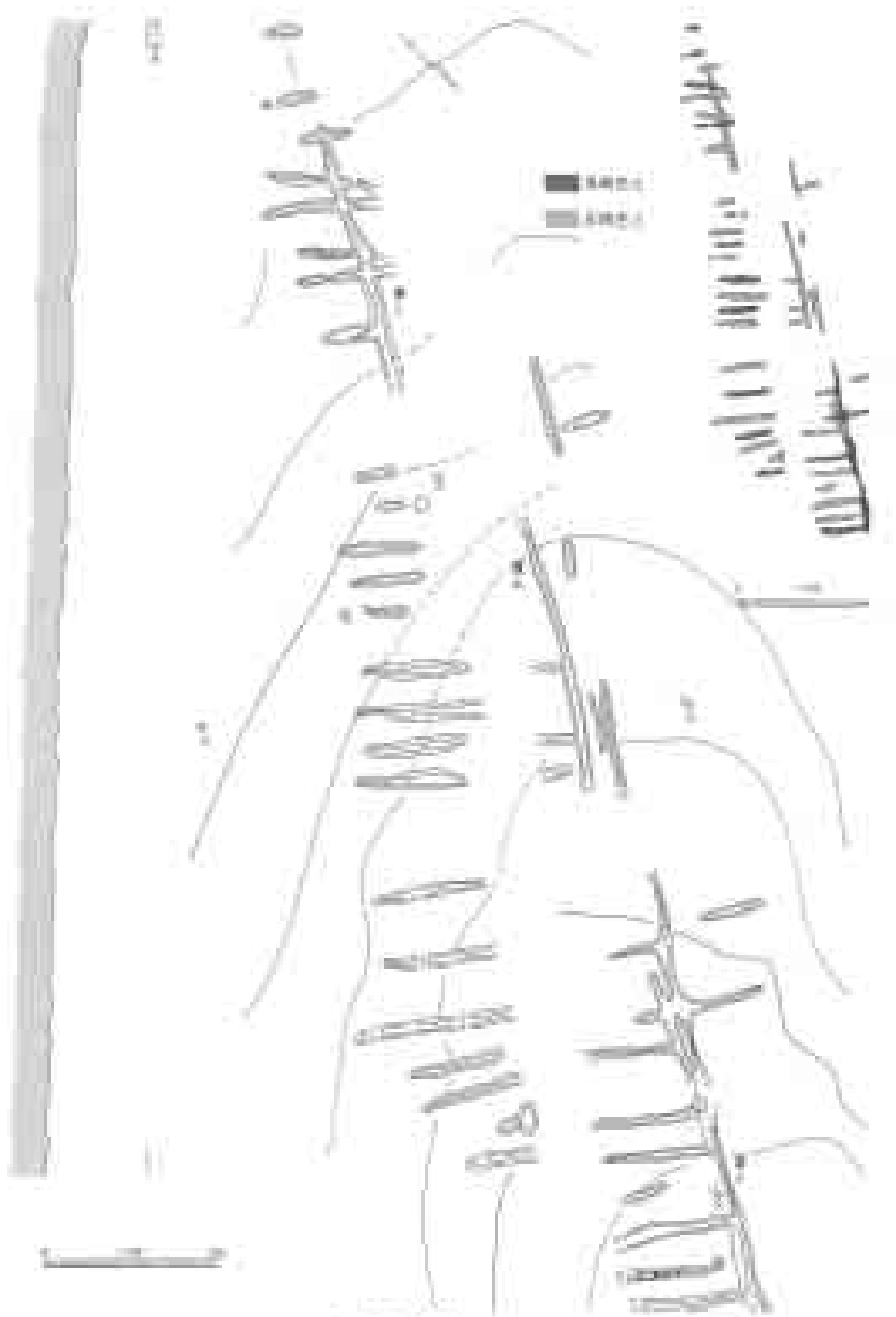


図47 溝群